

# 「英語読解」授業実践例と私の教育哲学

森 本 奈 理

## 1. はじめに

私の所属する日本英文学会の全国大会では、第2日目の最後に特別シンポジウムがあり、(2007年度を除く)ここ3年間は「このままでいいのか」と銘打たれた現在の英文科を取り巻く危機的状況についての意見交換がなされてきたのだが、その第1回目(2006年度)が「大学英語教育」に関するものだった。主旨は、大学教員が以前ではあり得なかったプレッシャーにさらされており、極端な場合には、学生が受験する各種資格試験の得点「ノルマ」が教員に課されている、というものだった。私が学部生であった頃にはあり得なかったことだが、今では大学にも *accountability* が求められる時代になっており、「授業評価アンケート」の導入がその最たるものと思われる<sup>1</sup>。先のシンポジウムは、どちらかという、この風潮を嘆くものであったが、この状況は語学教師にとってむしろチャンスなのではないか、と私は考えている。というのは、大学の語学教育が世間で問題にされるということは、それに対する注目度が増してきているということであり、意味ある議論がなされれば教育の質を大幅に高めうる可能性があると思うからだ。やはり、研究者の本質は討論にある以上、たとえ語学教育が副業的な位置づけであったとしても、それを巡る議論に一切耳を貸さないで、モノローグ的で独りよがりな教育スタイルに固執しつづけるのには問題があるように感じる。(私が勤務する専修大学ではこのような試みがなされつつあると聞いているが、)各教員が自らの授業にオープンな姿勢を取って、お互いの授業を *review* し、より

<sup>1</sup> 欧米の大学は「企業」化のプロセスにあり、その価値基準も「文化」から「優秀さ」へとシフトしつつある (Readings 1996)。

よいものにしていく努力はなされるべきではないのか。このような意図から、私は私自身の授業を報告しようと思立った。当然、私の授業には自分でも気づいていない様々な欠点があるはずだが、ここにできるだけ詳細に報告することによって、建設的な意見交換がなされることを願ってのことである。確かに、教師と学生全ての要求に応え得るような「完璧な授業」というものは存在しないが、それでも、それを目指す努力は払われるべき、というのが私の信念である。

それと同時に、授業例報告といっても、ただ目に見える物理的な側面を明らかにすればいいだけでなく、それを支える精神的な部分も明らかにする必要がある、と、この報告を書き始めて気づいた。したがって、報告の後半は、私の教育哲学とでも呼ぶべきものについて書いている。私の専門はアメリカ文学であって教育学ではないので、学問としての「教育哲学」には何の知識も持ち合わせていないが、「文学理論」がそれに代わりうる、ということを知った。通常は、読み手である私と文学作品との距離を分析する手段である理論が、私と学生との関係を分析する際にも有効なのだ。もちろん、この哲学は付け焼刃にすぎないかもしれないが、それでもやはり、教育の「原理」がなければ、外部からの批判にさらされたとき、反撃の可能性が全くないことになってしまう<sup>2</sup>。

## 2. 授業の目的

専修大学での英語授業担当は今年が初めてであり、「英語読解」という授業科目名を文字通りに解釈し、writing, listening, speakingではなくreadingを扱うことにした。ただし、readingにも大きく分けて「精読」「速読」の2つがあり、それぞれの目的・方法は全く異なるので、やはりどちらか一方に絞るほうが効果的だと考えた。そこで、初年度であり学生の習熟度に関する何のデータも持っていなかったのも、より基礎的だと思われる「精読」をやっ

---

<sup>2</sup> 教育機関の英語教員は、実業界・世間一般の人々・英語教育産業・文部科学省からのプレッシャーに防戦一方の窮地に立たされている (大津 2006)。

てみることにした。学生には大学入試までの学習事項の復習をさせることで知識の定着を図る一方で、教師としては学生の習熟度に関するデータをできるだけ多く集めることができ、次年度以降の指導に活かしていける、と考えてのことである。要するに、教師の立場からすると、外国語の必修科目は平常点での成績算出をする科目にしては受講者が 40 人前後と多いのが悩みなのだが、「精読」の授業はクラス全体の管理が最もしやすいというメリットがあるように思う。

「精読」のより具体的な目的は、英文を正確に読むのに必要な知識、すなわち英単語・慣用表現・文法・構文・文脈、の確認である。その意味では、私の「精読」方法論は近年ますます批判にさらされることの多い「大学における古典的な読解授業」「受験英語」の延長線上にあるものだが、そうはいつでもやはり、「精読」は語学の一側面を構成するものであり、語学に真剣に取り組むことにすれば、いずれかの段階で必ず取り扱うべき作業であるのは間違いない。

また、1 週 1 コマ 90 分の授業だけでは、語学の勉強時間として十分ではないので、できる限り宿題を課すことで、クラス外でもある程度は学習しなければならないように気を配った（表 1）。

表 1 1 週間あたりの学習時間（単位：分）

|          | 英単語 | 日本語訳 | 合計  |
|----------|-----|------|-----|
| 法学部 1 年  | 34  | 65   | 99  |
| 経営学部 2 年 | 71  | 104  | 175 |

上のデータは第 3 節で述べる担当学生に実施したアンケートからのものである。

### 3. 受講学生について

月曜日の 3, 4 限に授業を担当することになり、それぞれ「英語読解 1a」「英語読解 2a」という名称がついている。「英語読解 1a」の受講者は法学部 1

年であり、「英語読解 2a」の受講者は経営学部 2 年である。専修大学の学生に関するデータが全く無く、特に大学 2 年生の英語力がどの程度なのか読めなかったので、授業中に扱うテキストは両クラスとも同じものにしたが、結果的にはこれが良かったと思う。ちなみに、専修大学の必修英語科目では能力別のクラス編成を取っており、「基礎」「普通」「発展」クラスに分かれるが、私の担当したクラスは、両方「普通」クラスであった<sup>3</sup>。

学生の授業態度は、私の予想をはるかに超えて、極めて真面目であり、クラスの運営はとてもやり易かった。

学生に対して実施したアンケートで、各学生の出身高等学校と専修大学への入学形態（「一般入試入学」「指定校推薦入学」など）を確認したが、出身高等学校については両クラスとも「公立」出身者がほとんどであった。入学形態については両クラスで大きな差異があり、法学部 1 年の大多数が「一般入試入学」であったのに対し、経営学部 2 年の大多数は「指定校推薦入学」であった。とはいえ、「指定校推薦入学」の学生も何らかの形で「一般入試」対策はしていたようである。専修大学には付属高等学校が存在するが、付属高から内部進学者はそれぞれのクラスに数人在籍していた<sup>4</sup>。

もちろん、習熟度別の「普通」クラスとはいえ、学生の語学力は千差万別なのだが、大きく分けると、「一般入試入学」の学生の学力がやや高いように感じた。一方で、「指定校推薦入学」「内部進学」の学生は熱意で上回っているように感じた。

#### 4. 使用テキスト

後述するように、授業時間内に平常点評価の英単語テストを実施するため

---

<sup>3</sup> 「演習」が学年全体の上位 15~20%、「普通」が中間 55~65%、「基礎」が下位 20~25%、という分類になっている（宮前 2009）。

<sup>4</sup> 私立大学においては、これからますます「推薦」での入学者の割合が上昇していくと考えられるが、これは日本の大学入学選抜がアメリカのそれに近づきつつあることを意味している。このような形態での入学者に見られる「学力」のばらつきを補正するために、アメリカはリメディアル教育の先進国になっているが（荻谷 1992）、これと同じような試みを私はしているつもりである。

に、受講学生には市販の「単語帳」を購入してもらった。「英語読解 1a」のテキストは『キクタン Basic 4000』であり、「英語読解 2a」のテキストは『キクタン Advanced 6000』（ともにアルク出版）であった。オンライン・シラバスにてテキストを事前に告知しておいたところ、3分の1程度の学生が初回ガイダンスまでに購入し持参してくれたので、その分だけガイダンスがやり易かった。

授業内で使用する英文テキストについては、（今年度に限り）市販のものを使用することを断念したのだが、それは万が一レベルが合わなかった場合、学習効果が殺がれることを危惧してのことであった。そうする代わりに、適宜難易度を調整できることをねらって、私が作成したプリントを配布することにした。英文テキストをプリント配布にすると、欠席者の対応に苦勞するのだが、専修大学には「ポータル・サイト」という便利なオンライン・コミュニケーション・ツールがあり、このサイト内の掲示板にテキストの Microsoft® Word ファイルをアップロードし、欠席者には各自ここからダウンロードしてもらうことにした。

英文テキスト作成にあたっては、オンラインのニュースサイトを活用した。それぞれのテキストで難易度を意図的に変えたため、やや易しめのテキストは *National Geographic Kids* から、やや難しいテキストは *The New York Times* から取ることになった。これは、ネイティブ向けに書かれた英文を読むことで、いわゆる「生きた英語」にできるだけ触れてほしいと願ってのことでもある。

## 5. 「隠れたカリキュラム」

文学部英文科の出身でアメリカ文学を専門にする私が、法学部・経営学部（といった「畑違い」の学部）の学生を指導することは、大きな悩みの種であった。彼らに迎合して法学・経営学の専門テキストを使用すれば、教師たる私自身が全く楽しめないし、反対に文学作品をテキストにすれば、授業の難易度は高くなるうえに、学生にとってあまり興味の向くものでもなさそう

である。

そこで、テキストを選定するにあたっては、以下の基準を用いることにした。銀行員の知人がふと「アメリカ人は個人レベルでは理解できても、国民全体のレベルでは全く理解できない（ので株式市場の動向が読めなくて困る）」と漏らしたことがあったのだが、これはアメリカ文学研究者としての私の実感とも共通する。日本人である我々にとってアメリカ人は最も身近な外国人であるのだが、国民という単位で見た場合、両国民の思考法は正反対であるように思う。私からすると、「アメリカの常識は世界の非常識」なのだが、アメリカはこのような定義でもって無視しておいていいほど小さな存在ではなく、世界唯一の超大国であり日本の同盟国でもある。なので、あまり日本にはなじみのないもので、アメリカならではの思考法に触れることができる内容の文章をテキストとして採用することにした。例えば、前期の授業では、「奴隷制度」「政治的正しさ (political correctness)」「ピューリタニズムと魔女狩り」といった内容の英文を読むことにした。（後期の授業では、むしろ個人に焦点を当て、Milton Friedman, Francis Fukuyama といった人物を紹介するつもりである。）

## 6. 各回授業の構成

### 6.1 英単語テスト

毎回授業開始時に英単語テストを実施した。各回の予習範囲については、初回ガイダンス時に配布したシラバスに明記した。使用テキストの『キクタン Basic 4000』『キクタン Advanced 6000』は、1日あたり16単語、1週間あたり112単語で構成されているのだが、とりあえずのところ、その半分の56単語を1回の予習範囲として割り当てた。テストでは、その中から10単語を選び、全て英単語を問題として与え、その訳語を問うことにした。これは、「読解」の授業なので、英語が書けることよりも読めることのほうが大切だ、という判断に基づいてのことである。テストは2～3分で実施して、終了後回収、授業後採点で、翌週授業開始前に返却した。

英単語テストは平常点の一部になる重要なテストなので、遅刻者には罰として受験を認めなかった。そのために、毎回授業開始 10 分前には教室に行き、定刻通りに授業を開始するように心がけた。アンケートでも、「毎回定時に始まる」ことを評価してくれた学生もいたが、これはうれしいかぎりである。

## 6.2 前回学習事項の復習

英文テキストを 1 つ終わらせるたびに、その中で出てきた重要文法項目を学ぶために「復習」の時間を設けた。プリントを用意し、文法事項を簡単にまとめた後、類題演習をやってみた。前期の主なトピックは「関係詞」「分詞構文」であった。「関係詞」については、英文中に「関係代名詞（目的格）の省略」が出てくると必ず引かかる学生が複数いたことから、ポイントとして扱うことに決めた。「分詞構文」については、*The New York Times* のようなやや難易度の高い英文になると、極めて高い頻度で使用される文法事項なので、私の発案で扱ってみたが、学生は「関係詞の省略」という概念ほどには苦手にしていなかった。アンケートによると、これら 2 つの項目と並んで、「仮定法」が苦手だという意見が多かったので、後期ではこれを扱う予定である。

## 6.3 音読・訳読

音読・訳読が授業のメインなのであるが、これは昔ながらの方法論なので、説明することはあまりない。学生を指名して英文を音読してもらい、日本語の訳読もやってもらう。小人数の対面授業なので、各回とも全員に 1 回は指名して口頭発表してもらうつもりでいたのだが、40 人前後のクラスではこれがなかなか難しかった。

このパートは、学生の負荷が低いかわりに、教師の側は非常に大変である。日本語訳については口頭での説明を書き取ってもらったが、構造が難しい英文については全て黒板に板書し、語句のつながりや修飾関係を明示するよう

にした。もちろん、学生はこれをノートに写すわけだが、語学学習とこのような「手を動かす」作業とは切っても切り離せない関係にあると思うからである。さらに、学生の解答をよく聞いて間違いを分析し、後日扱う「前回学習事項の復習」にフィード・バックしなければいけない。この「復習」セッションで文法を詳しく扱うため、訳読の解説では文法に深入りはしない。文法解説に気を取られるあまり、訳読の作業がいちいち中断されるのを防ぐためである。

また、英文を正確に解釈するには、「文脈」の把握も不可欠なので、新しい英文を配布し宿題を指定する際に、「人種問題」「宗教」「歴史」などの周辺予備知識を与えることにした。これは授業の残り時間での作業だったので、あまり詳しくはできなかったが、インターネット上の記述や動画などを見ておくように指示することもあった。

## 7. 学期（前期）における授業構成

### 7.1 第1回（初回ガイダンス）

初回ガイダンスは2部構成である。前半はシラバスを配布し授業概要の説明を行う。反省すべき点は、この時点で座席を指定にして、座席表に氏名の記入をさせるべきであった。（実際に座席表に記入をさせたのは、第2回の授業終了時であった。）後半はアンケートを配布し記入をさせるが、アンケートとは名ばかりで、半分は英文の日本語訳を求める問題であった。この問題の出来は単位の評価に含めないことを告げたあとで、学生には問題を解いてもらった。従来型のアンケートによくある「英語は得意ですか、不得意ですか？」といった設問では、学生の能力が正確に測ることができず、このように問題を解かせることで、より具体的なデータを得るための措置である。

### 7.2 第2回～第12回

これは第6節で述べた内容がそのまま当てはまるので、ここで改めて述べる情報はない。



### 7.3 第13回（前期末試験）

外国語科目は「平常点」で単位認定を行うため、通常授業最終回に期末試験を行い、特別に設けられた試験期間に行わない。この授業では毎回小テストを課しており、単位認定にかかわるデータもかなりそろっているので、期末試験を実施しないというオプションもあったのだが、大々的に「復習」の時間を取ることも英語学習では大切なことなので、やはりきちんと実施することに決めた。

ところで、専修大学経営学部においても各学期末に学生による授業評価アンケートがあるのだが、これの実施に授業時間をある程度割かなければいけないのが嫌だったので、期末試験実施の直前にアンケートを取ることにした。アンケートはマークシートと自由記述用紙に別れていて後者はただ罫線を引いてあるだけの白紙だったので、これを使わず、自作のアンケート用紙を用意していった。このアンケートは、6つの質問からなっており、それぞれの質問は、「この授業で良かったところ」「この授業で悪かったところ」「英文テキストで一番良かったもの」「英文テキストで一番良くなかったところ」「予習（和訳）にかかった時間」「英単語暗記にかかった時間」について問うものであった。このアンケートのポイントは、授業の良否を問う質問を別々にしているところで、「授業には完璧はあり得ず、どんなに良い授業にも欠点はあるし、どんなに悪い授業でも長所はある」ものなので、必ずどちらも書かせることで、物事を冷静に分析する視点を学生に要求するものであった。ちなみに、アンケートには氏名を書いている。

試験は30～45分程度で終了する簡単なもので、範囲はかなり絞った上に、1か月前には告知をしておいた。試験問題は3つのパートから成り、大問【1】は英単語の復習であった。ただ、これをまともにやると、「56語×11回=616語」の復習をさせることになってしまい、学生の負担があまりにも大きいので、この中から重要英単語100語を選び出してリストにし、学生に配布しておいた。大問【2】は、授業中に扱った英文1題をそのまま出題し、①慣用句の穴埋め問題（前置詞の部分ブラックボックスにして、そこに入る前置詞

を答えさせる形式)、②下線部和訳問題で出来ている。大問【3】は、新出英文による実力問題で、下線部の日本語訳をやってもらった。6.2 で述べたように、前期では「関係代名詞の省略」「分詞構文」を重点的に扱ったので、これらをポイントとして含む英文を出題することにした。

## 8. 学生の評価基準

### 8.1 平常点

平常点と期末試験の点数配分は 50:50 でやってみた。たとえ英語が全くできない学生でも、毎回きちんと授業に出席し課題をこなしていれば、それだけで単位取得が可能であり、かつ、実力のある学生が普段は多少手を抜きつつも最後の期末試験で一発逆転ができるようにするために、このような点数配分を取ることにした。

平常点 50 点の内訳は、出席点 20 点・小テスト 20 点・宿題 10 点である。出席については、専修大学には出席回数が全授業回数の 3 分の 2 に満たない場合単位の習得はできない、という内部規定があるのでそれに従ったが、1 回の欠席につき 2 点の減点を行った。ただし、正当な理由がある欠席に関しては、そのことを証明できる書類がある場合に限り、「公欠」扱いにすることにして、上記のような減点は行わなかった。

小テストについては、毎回 10 点満点で点数をつけたので、全 11 回の平均値を出し、それを 2 倍にすることで算出した。(各回の結果については、表 2 を参照のこと。) ここで頭を悩ませたのが、欠席・遅刻で小テストを受けることができなかった場合にどのような評価をするのか、という問題であり、欠席・遅刻は小テスト受験放棄とみなして 0 点をつけることも考えたが、これでは 1 回の欠席による失点があまりに大きすぎる気がしたので、前回得点の 2 分の 1 を欠席した回の得点とすることにした。ただし、このやり方では、小テスト対策をさぼりがちで低得点が習慣化している学生よりも、毎回満点を取るような真面目に頑張っている学生のほうにより被害が大きいので、今なおもっとよい評価基準を模索している段階である。(「公欠」扱いの学

生に対しては、小テストの再試験を課すことにした。もちろん、再試験の問題は、本試験のそれとは別物である。)

表2 英単語テストの平均点 (10点満点)

| 授業回    | 2   | 3   | 4   | 5   | 6   | 7   | 8   | 9   | 10  | 11  | 12  |
|--------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 法学部1年  | 8.9 | 8.3 | 9.3 | 8.2 | 9.0 | 8.8 | 8.1 | 9.1 | 8.9 | 8.6 | 8.7 |
| 経営学部2年 | 7.9 | 8.8 | 7.9 | 8.0 | 7.8 | 8.6 | 7.1 | 8.1 | 6.5 | 7.7 | 6.9 |

宿題については、小テスト実施後、教室を巡回してチェックし、不備を見つけると1点減点をすることにした。大学生に対してまでこのような「宿題チェック」をするのは、大学本来の趣旨に反するあまりにも愚かな行為だとお叱りの声もあろうことかと思われるが、外国語の必修科目は、その他の教養・専門科目とは異なり、高等学校の授業の延長線上にあると私は考えているので、私自身の中にも「わだかまり」はあるのだが、その部分はあくまで語学教師としての仕事だと割り切ることにした<sup>5</sup>。(私自身は、このような管理教育が嫌いだったので、教師としての私は、学生としての私が「最も授業を担当してほしくない」教官である。)この作業で時間を取りたくないために、学生には授業用に1冊ノートを買ってもらった。そして、ノートは「見開き」で使用し、左側のページには配布した英文テキストを貼り付け、右側のページに日本語訳を書いてくるように指示をしておいた。そして、宿題チェックの際には、ノートを開いた状態で机に置いてもらい、きちんとそのような状態になっているかどうかを見るようにした。座席を指定席にしていたこともあって、約40人のチェックも1~2分で終わらせることができた。

<sup>5</sup> ただし、大学であっても、理系学部であれば、このような宿題チェックはよく行われているらしい。(私の出身校である)東京大学でも、教養課程の物理・化学講座では、教官がチェックをしたことを示すために、ノートに検印が施されている。

## 8.2 期末試験

6.3 で述べたように、期末試験は大問 3 題から成り立っており、大問【1】の英単語の復習に 10 点、大問【2】の授業の復習に 25 点、大問【3】の英文日本語訳実力問題に 15 点を配点した。この配点で単位評価を行ったところ、80 点以上の「優」評価が多かったので、「優」評価と「良」評価の区別をもっと厳密に行うためには、大問【3】の配点をもう少し高くすべきであったかもしれない。

## 9. 本メソッドの長所・短所

本メソッドの長所は、英語が苦手な学生であっても、ある程度の「やる気」さえあれば、単位修得が可能である、という点に尽きる。本来自由放任を売りにしている「大学」という「ユートピア」を、あたかも Michel Foucault が言うところの「パノプティコン」式管理体制が支配する「ディストピア」に変えてまで私が目指したのは、まさに「クラス全体の利益を最大化する」ためのシステム構築であったのだ。普段から小テスト・宿題チェックで学生を管理し、学習を半ば強要することによって、真面目に課題をこなすことの「気持ち良さ」を実感してもらえれば、自ずと期末試験の結果もついてくるであろうという期待があったのだ。（規則正しい生活が「精神」衛生上良いことと同じである。そして、「(近代) 権力」のターゲットは「肉体」ではなく「精神」である。）その意味でも、「ポータル・サイト」という教員・学生専用のオンライン掲示板を活用できたことは大きかった。授業が終わるとすぐに、欠席者向けに、当日配布した教材をアップロードし、次回授業までの宿題を告知するように心がけていた。学生が教材をダウンロードするためには「ポータル・サイト」にログインする必要があるのだが、メッセージについては、携帯電話に電子メールとして送られてくるので、学生はそうしたメッセージを受け取るたびに、「ポータル・サイト」に私の投稿があったことを知ることができる。（ちなみに、私の留学先であった The University of Maryland にも「ポータル・サイト」と同じようなシステムがあったのだが、

そこには教官がメッセージを残したり教材をアップロードしたりすることしかできず、メッセージを電子メールとして配信する機能がなかったので、授業の直前にその授業で読むテキストが投稿されると、そのテキストの存在を知らないまま授業に臨むことになり、教室でのディスカッションに全くついていけないで苦勞したことがままあった。そのような欠点があったにしても、オンライン上で教材が手に入れられる便利さを知ったことは、アメリカ留学中に経験した最大のカルチャー・ショックの1つであり、帰国後大学に勤務するようなことになれば、是非とも日本でもこのようなシステムを導入すべきだと常に考えていたのだった。というのは、日本での大学院生時代、授業で使う教材は、研究室に用意してある「原本」をコピーすることで用意しなければならず、コピーを取りながら、「人的資源」がかなり無駄になっていることを秘かに憂っていたからである。)

インターネット・携帯電話は、現代文明の産み出した最良のメディアであるが、これらの助けを借りれば、権力を持つ側の人間は、まさに「不可視の権力」を振るうことができるのである。ここまでの記述からすでにお気づきの方もいらっしゃるだろうが、私の基本的な人間観は「性悪説」である。「性悪説」に立脚しているので、個人に無制限の「自由」を与えると、Thomas Hobbesの「万人の万人に対する闘い」状態に陥ってしまう、と私は信じている。この状態では、強者のみが「自由」を享受でき、弱者は「奴隷」に等しい扱いを受けることになる。そして、この状態が社会全体にもたらす利益はそれほど大きくない、と私は見ている。社会全体の利益を最大化するためには、個人の「自由」はある程度制限するのが望ましいのである。(そして、このロジックは大学の語学クラスにも当てはまる、と私は思う。) 精神分析理論によると、人間は生まれた時点が最も「変態(性欲)」的であり、年をとり社会化されるにしたがって「正常(性欲)」になる、ということだが、これは実に深い洞察である。

もちろん、これは「教師」という権力を振るう立場から見た私の「自由」論であって、一人の人間としては、全く逆の信念を持っている。大学時代の

恩師は学生の内面を見抜く達人であったが、私に対しては「あなたに教えることは何もない。なぜなら、こちらから強制的にやらせて、伸びるタイプではないからだ。」という趣旨の発言をされた。その当時は多少「責任放棄なのか。ひどいものだ。」と思ったものだが、今となって正しかったのは恩師の知見である。自由放任でなかったならば、たとえ研究者になっていたとしても、自分の力で新しい世界を切り開いていけるこの職業の醍醐味を知ることなく人生を終えてしまうかもしれなかった。ただし、恩師は「あなたのようなタイプの人間はかなり珍しい」と、私を少数派に分類することも忘れてはいなかったので、教師としての私は、受け持つ学生に「私とは全く異なる気質」を見ることにしているのである。要するに、教師としての私が考える、最良の思想家は Jürgen Habermas であり、クラスは1人の教師と40人の学生から成る1つの社会である以上、「理性」のような共通了解事項・管理システムがなければ、最悪の場合、Hobbes 的「アナーキー」に陥ってしまうのである。もちろん、この場合に教師が呈示する「理性」は、「道具」的なドグマであってはならず、学生との「対話」によって常に自らを変革できる柔軟性のあるものでなければいけない。

それでは、本メソッドの短所に移りたい。短所は、英語のできる優秀な学生が犠牲になってしまうことである。英文テキストの難易度は、そのような学生にとっても問題のないものを選んだのだが、いかんせん毎回の進度が遅すぎるのである。（*The New York Times* 程度の難易度だと1回で15行ぐらいしか進めなかった。アンケートによると、上位層の不満はまさにこのことだった。）この欠点は授業を始める前から分かっていたことなので、上位層は少数派だったこともあり、事あるごとに「この授業では優秀な人たちが犠牲になってしまいますが、その人たちはこの授業をためにはならないが楽に単位が取得できる科目と捉えて、許してください」と謝ってきた。このような上位層にとっては、自由放任のやり方が彼らの利益を最大化させることを私は知っているのだが、このやり方は語学教師としての私のポリシーに反するので、（とりわけ必修科目で）私がこのやり方を選択することはない。「1

人の王様と残りすべて奴隷」状態を作りたければ「自由放任」の指導が向いており、「全員がそれなりに優秀な将校」状態を作りたければ「徹底管理」の指導が向いている。この2つの指導法はコインの両面なので、平面に置けば、一度に表か裏かのどちらか一方しか見ることができない。教育の現場は、水平面ではなくて、斜面だと私は考えるので、このコインを立てて置くという選択肢は存在しない。もっと正確に言えば、コインを立てて置けるような「努力」はなされる「べき」ではあるが、そのことに気を取られるあまり、どっちつかずの中途半端に終わることを私は一番嫌うのである。私は「性悪説」に立つ「リアリスト」であるので、このような「べき」論にはあまり興味がないのである。あるいは、deconstructionのような「べき」論をひも解いてみても、その代表的思想家 Paul de Man は insight (洞察) と blindness (盲点) という二項対立を提示している。ある洞察には、それを可能にする盲点が必要に存在する。(我々は、de Man と同じく「人間 (man)」なので、全ての問題を均等に見渡せるパースペクティブには絶対に立てない。人間全体を man で受けるのは性差別的ではあるが、ここでは de Man と man をかけた冗談として使っているので、許していただきたい。)

この項のタイトルとはいささか論点がずれてしまった感もあるが、本メソッドは、ただの成り行きで生まれたものではなく、私の信念が下支えになっていることをご理解いただけると幸甚である。

## 10. 英語教育とは何か

できれば、この論考は単なる授業報告で終えたかったのだが、「英語教育とは何か」という問題はやはり避けて通ることができないようだ。英語教育のメソッドは、大きく2つに分けると、旧来型の「文法」重視のそれと現行型の「コミュニケーション」重視のそれがあるが、ちょうど両メソッドの過渡期に中等・高等教育を受けた私が、現行型の英語教育を受けてきた学生を担当することによって考えさせられたことを書いていきたいと思う。ちなみに、両メソッドに対する私の見解は、どちらもそれなりに一理のあるもので、

ある程度高度な英語力を身につけることを目標に定めれば、どちらのメソッドも経験する必要がある、というものである。（逆に、英語使用領域を「日常会話」程度に限定するなら、「文法」を扱わずに、「定型表現」を暗記していくだけのやり方が手っ取り早いであろう。）私は中学1年から高校2年までの最初の5年間を、ほとんど「文法」を教わらずに英語を学んできたが、その結果、高校2年の時点で「英語Ⅱ」の検定教科書が全く理解できない状態にまで英語が分からなくなってしまった。夏休みに1章を日本語訳する課題をさせられ、なんとか自力で頑張ってみたが、全く歯が立たず、友人にかなりの部分を助けてもらった記憶がある。高校3年で初めて、「文法」を使えば英文を正確に読めることを教えてもらい、これには本当に目から鱗が落ちる思いをした。私は数学が得意で論理的思考には自信があったので、「文法」で英文の基本的な「書きぐせ」を押さえれば、あとの「話者それぞれによる誤差」はそれほど大きくはないだろうから、英語の苦手な自分でも何とかなるかもしれない、と狂喜したものである。ただし、この「文法」重視のメソッドでうまくいくのは reading, writing に限った話で、listening, speaking になると、「習うより慣れよ」が正しいことをとりわけアメリカ大学院留学時代に実感させられた。要するに、英語4技能のうち、何をターゲットにするかによって、自ずと学習・教授方法は変わってくるのであり、全ての技能に適用可能な1つの方法論は絶対に存在しない、と私は思っているのである。

ここで、文部科学省が定めている現行の「高等学校学習指導要領」を見てみよう。その第8節第1款「目標」には、「実践的コミュニケーション」という文言があるが、ここで「実践」という語が使われているのは本当に興味深い。何をもって「実践」となるのかは十人十色で、ある人にとって実践的なものが、他の人にとって全く実践的でないということは往々にしてあるからだ<sup>6</sup>。私にとって、オーラル・コミュニケーションの最も実践的な領域は、大学の教室でディスカッションをする際に使用するそれで、なかでも専門の

---

<sup>6</sup> 「実践」という用語が持つ曖昧さに気づき、使用に反対した「要領」作成委員もいた（金谷 2008）。



アメリカ文学に関するものである。アメリカ留学時代の「文学理論」のクラスでのことだが、Jacques Lacan の精神分析理論に関しては議論をリードできた私が、授業前に「日本の漫画っておもしろいね」と話しかけてきた同級生に対しては、「漫画は嫌いだ」としか返答できなかった。漫画は私の興味の範囲外なので、これについて語りうる語彙を、英語のみならず日本語でも、私は持っていないのだ。また、日本人が英語を苦手に行っていることを指摘する際に、「外国人に道を尋ねられて返答できない日本人」という例がよく挙げられるように記憶しているが、「道順」の説明は母国語の日本語でも相当難しいはずである。つい先頃、JR 神田駅の位置が分からず、道行く人に「道順」の説明を求めたが、10 人程度にあたってようやく「この道をまっすぐに行けばいいですよ」という解答を得られた。確かに、アメリカ人は、日本人よりもはるかに気軽に道を尋ねてくるので、このような状況を想定した実践的訓練は一理あるのだが、休日に The University of Maryland のキャンパスの大通りを歩いていると、見知らぬインド人留学生に呼び止められ、「道を聞いてくるのだろう」とたかをくくっていると、彼の研究室のドアを開けるためにはどうしたらいいのか、という質問をされた。このように、道を教える状況 1 つ取ってみても、そう簡単にはいかないのである。

こう書いてしまうと、現行の「コミュニケーション」重視のメソッドに否定的な意見を私が持っているように思われるかもしれないが、それはある程度までその通りである。というのは、現行のメソッドには、insight-blindness 問題として片付けるわけにはいかない、1 つの大きな落とし穴があるように感じているからである。つい先日、現在高等学校で行われている「オーラル・コミュニケーション」の授業実践例を見学する機会があった。それは、1 回 50 分の授業で 1 つのテーマを完結させる、よく練り上げられた授業であり、授業中の反復練習も十分で、受講学生の内容習得度も高そうだったが、予習を課しておらず文法の説明もないので、「応用」が全くきかないように思われた。英語学習には、「質」的な側面と「量」的な側面の両方が必要とされるのであるが、この授業では扱う英語の「量」があまりにも少なすぎるのだ。

また、これと連動して、「文法」に触れないため、学生に自学自習できる応用力が全く育たないようにも思われた。「文法」を教えることのメリットの1つとして、最終的に学生が自学自習できる応用力が身につくことが挙げられる。

私自身の授業の分析に戻ろう。専修大学での初年度の担当クラスで、私が「英文精読」を行うことにしたのは、先述した通り、授業のタイトルが「英語読解」となっていたのを文字通りに解釈したためなのであるが、しかしただそれだけが理由ではなく、英文を読むことに主眼を置きながら、文法も教えていくことで、学生がこの後の人生で自学自習できる応用力を身につけてくれることを願ってなのだ。そして、ありがたいことに、授業のシラバス作成にあたって、大学は私に何の縛りもつきつけず、文字通り「自由放任」の姿勢だった。以前から心残りだったのは、現行の英語教育で文法が敵視されるのはそれなりに納得のいく理由があるとは思っているのだが、一方で、教員の側で文法をきちんと教える努力がなされていないのでは、という疑念も私にはあったことである。例えば、今これを書きながら、私は後期の授業を担当しているが、ちょうど「仮定法」の説明を終えたところである。「仮定法」は「英文法」の難所であるとよく聞かすが、確かにいきなり *If I were a bird, I could fly to you.* のような例文を見せられて理解しろと言われても、これで理解できる学生はいないだろう、と私は思ってきた。（私は一時期、英語学習参考書を読むのを趣味にしていたのだが、ほぼ全ての参考書でこのような底の浅い解説しかなされていないことを残念に思っていた。）そこで、「仮定法」の実際の姿を説明する際に、私は、「法助動詞 (will, may, can)」の説明から始め、これが「過去時制」を持つことで、どのようなニュアンスが出てくるのかを説明した。この説明はかなりインパクトがあったようで、説明の後に演習をやってみたが、ほとんどの学生が「仮定法」表現の最大の特徴を理解したことを解答の際に示してくれた。もしも大学が英文法のテキストを指定してきたとしたら、私のオリジナルな説明はできなかったであろう。専修大学での授業は大変に楽しいものであるが、この楽しさの源泉は、やはり

私個人が一番力を発揮できる「自由放任」のスタイルにある。

## 11. おわりに

今年1年は、「精読」をやってみると決めたことなので、ここまで「精読」の方法論を擁護すべく紙数を費やしてきたが、もちろん、「精読」にもメリットとデメリットの両方がある。「精読」は英文を正確に読む思考力を養えるメリットがあるのに対し、単位時間に触れる英文量が極めて少ないので、大量に情報処理をしなければならない状況においては全く役に立たない。そのような状況においては、「精読」をきっぱりとあきらめ、「速読」という、全く異なる頭の働かせ方をしなければいけない。例えば、(文科系の)研究者が論文を執筆する際には、先行研究にあたるのが必須である。このときに、「精読」しかないのであれば、参照した先行研究の数は必ずと限られてしまうが、いくら本論が魅力的なものであっても、2, 3の先行研究にしか触れられていないのであれば、論文としての価値は全くないものと想像できる。それに対して、まずは「速読」でできるだけ多くの先行研究にあたり、そのなかから「精読」に値するものだけをじっくり読んでいくほうが、はるかに論文として有意義なものになるのである。そして、このことが当てはまるのは何も論文執筆だけに限らない。大学生の授業レポートであれ、事業の企画書であれ、締め切りがある以上、「精読」的やり方だけでは、読み手・聞き手を納得させられるだけのデータを集めることはできない。来年度の担当については今のところ未定ではあるが、それでも、今年度の方法論を批判的に捉えて、「速読」をやってみたいと考えている。そして、また同じような場で「速読」授業の報告も行いたい。

## 参考文献

Readings, Bill. (1996). *The University in Ruins*. Cambridge, MA: Harvard University Press. [『廃墟のなかの大学』青木健, 斎藤信平訳, 東京: 法政大学出版局]

- 大津由紀雄. (2006). 「原理なき英語教育からの脱却を目指して一言語教育の提唱」, 『日本の英語教育に必要なこと: 小学校英語と英語教育政策』, 大津由紀雄 (編著), 東京: 慶應義塾大学出版会
- 金谷憲. (2008). 『英語教育熱: 過熱心理を常識で冷ます』. 東京: 研究社
- 荻谷剛彦. (1992). 『アメリカの大学・ニッポンの大学: TA・シラバス・授業評価』. 東京: 玉川大学出版部
- 宮前和代. (2009). 「習熟度別英語授業の実践と成果—法学部の調査を中心に—」, 『専修大学外国語教育論集』第37号, 55-77, 専修大学 LL 研究室